

(1) ヒアリング記録シート（グローバルセンター）

団体名等	特定非営利活動法人グローバル人材開発センター (以下「グローバルセンター」)
ヒアリング日時	平成30年10月9日（火）15時～16時30分
ヒアリング実施者	＜市民参加推進フォーラム委員＞ 杉山準座長，金田喜弘委員，佐々木達憲委員 ＜京都市職員＞ 山下比佐暢

<聞き取り内容>

グローバルセンターの概要

グローバルセンターは、若者一人一人が自分の色を活かし、風通しの良い社会をつくるということを理念にしており、大学と経済団体と行政をつなげるハブ機能を担っている。

学生のプロジェクト支援や、企業と学生との合同研修、留学生の就職マッチング支援など、学生と大人・企業をつなげる事業を主に行っている。

関わっている若者は、主に大学生であり、一部の高校生とも関わっている。専門学校生とは関わっていない。グローバルセンターのプロジェクトに参加した大学生が社会人になっても参加している場合もある。また、期間限定のインターシップ生もいる。企業研修もしているので、企業の若手・中堅の方との関わりもある。

スタッフは10名（女性6名，男性4名）である。プロジェクトを進めているスタッフは4～5名である。1プロジェクト当たり5人～6人の学生がいて、スタッフ1人で30人ぐらいの学生を見ている。

学生がグローバルセンターのプログラムに参加するきっかけ

学生がプログラムに参加するきっかけは主に2パターンある。

1パターン目は、何かしたいけど、何をしたらいいかわからないという学生が、たまたまグローバルセンターのことを知って参加する場合である。そういった学生は、グローバルセンターの職員が読んでいる本に興味を持って本を読みだしたり、ここは安心できる場だと感じて、何か動き出したりする。

2パターン目は、グローバルセンターのプログラムを授業で受けた先輩から、面白いと聞いて参加する場合である。

このほか、世界を平和にしたいなど熱い思いを持った学生も稀に来る。そういった学生は、サポートなしでも活動を始めることが多く、グローバルセンターは通過点という印象である。

学生のモチベーション

学生がグローバルセンターのプログラムに参加するモチベーションは、金銭的なことではなく、つながりたいという感覚だと思う。企業の社長とつながりたい、キャリアにつながりたいという学生もいるが、参加しているうちに、後輩や仲間に教えてあげたいといった気持ちになる。学生は、人に会いにここに来ているのだと思う。

自分で何かできるという気持ちも大事である。例えば、グローバルセンターの職員が何かプロジェクトを進めたりしても、学生は「大人の立場だからできるんだろう」という気持ちにな

る。ただ、同級生が活動を始めると、同年代の自分も「できるかも」と思い、活動を始める学生が増える。

また、モチベーションの維持としては、役割を任せること。そして悩んでいる時にちゃんと話を聞くことが大事。そうすると、プロジェクト終っても、就職相談に来てくれたり、社会人になっても相談に来てくれたりする。

学生との関わり方

大人に相談したときに、意見を否定されると次から相談しにくいと言う若者もいるので、そうならないように気を配っている。若者は、何かやりたいてって言った時に否定されるのではなく、受け入れられる経験が大事である。

1年を通じて関わり続ける学生は100人中2～3人。イベントに呼びかけて来てくれる学生が10～20人。思いはあるけど、うまく関われない予備軍が50人ぐらいである。

職員が、一人一人とどう向き合うかが、学生が残るかどうかに大きく影響している。

学生の行政に対する意識

自分が5年間、学生と関わった中では、行政職員になろうとしたのは、1人だった。

また、行政が自分達の言うことを聞いてくれる存在として、学生は認識していないので、行政を動かそうという発想がそもそもない。

学生が行政との関わりを増やすために

①市政参加やまちづくりは、とっつきにくいかもしれないけど、例えば、ポップで楽しくて、おしゃれなしつらえがあれば、参加する学生もいるかもしれない。更に、市政参加とは意識していないけど、いつの間にか、参加しているという形もある。例えば、餅つき大会と言っているけど、実は防災訓練になっているという例もある。

長野県の塩尻市では、職員だけでなく、市外からもいろんな人を呼んで、大学のゼミともコラボして、ポップな感じでイベントをしている。

行政と市民が協働して作る場がよいと思う。例えば、グローバルセンターと市民参加推進フォーラムで一緒に何かやるなど。

②今、京都市が「新しい文化政策」のアイデアコンテストを行っており、それを受けて、学生でアイデアを出そうと言うプロジェクトが進んでいる。学生は、市政参加だという意識はないが、気が付いたら市政に政策提言するという方向に向かっていた。このように、知らない間に、市政につながっていたということがいいと思う。

③社会に出る時は、みんな肩に力が入る。多くの若者が大企業志向で、他の選択肢を知らない。グローバルセンターでは、学生がありのままいれるように丁寧に支援をしている。その中で、コーディネーターと話して、企業や市政など、自分の興味の方向性が出てきて、その先に市政参加があるのだと思う。

京都市の取組で良いと思うところ

各区のまちづくりカフェは、今後進化していくと思う。ちゃんと聞いてもらえる、聞くことが大事だと思える貴重な場である。各区のまちづくりカフェについて、学生の参加者を増やすためには、学生が運営に関わるとよいと思う。学生がリーダーになって、部活みたいにすれば、学生ががんばって学生を集める。学生には活躍の場が必要である。

若者は場やコミュニティに関心を持つ前に、人への関心が最初にある。運営側と参加者で顔の見える関係をつくることが大事である。

<ヒアリング実施者の所感>

<杉山座長>

学生は人生経験が少ない中で、社会とのつながりを考えるのが難しいのは当然である。まずは、グローバルセンターなどの活動でもなんでも、参加してもらうことが大切で、その先に、企業、地域、行政のことを感じ、その延長上に市政参加があればよい。

市政への参加を我々が求めているように、地域の（中小）企業や地域の各種団体などは、若者を求めており、グローバルセンターはそのつなぎ手として実質的な活動をされていると感じた。特に印象的だったことは、若者は活動そのものの意義を理解し活動に参加しようと思うより、「人」（グローバルセンターのスタッフなど）に影響を受けて行動を起こすことがあるということ、その感覚は腑に落ちた。スタッフの体験やその人となりが若者に影響を与えたり、若者一人一人の「思い」や「彼らを動機づける本質的なところ」に丁寧に寄り添うことで、信頼関係が生まれ、それによって若者が動かされることは想像に難くない。若者にとって市政参加という行為や言葉はピンとこなくても、信頼できる先輩が勧めることならやってみようと思えるような、「関係づくり」は有効なのではないか。ひとくくりに「若者」として扱うのではなく「個」それぞれと向き合う（プロセス）の大切さを感じることができた。

<金田委員>

グローバルセンターは、学生がプロジェクトを体験する機会があって、そこで力を発揮できるよう、職員がきめ細かくサポートしていると感じた。

市政についても、すぐに参加できるものではなく、そこまでの道筋や、考える入口を丁寧に示していく必要があると感じた。そうした道筋をつくることのできるプログラムがあればよい。

<佐々木委員>

市政参加という言葉が自分ごとになりにくい。最近の学生は忙しいという話がある中で、グローバルセンターは、若者の心の整理や、若者が次のステップに行く役割を担っているのだと感じた。その先に、市政参加があればよいと思う。

<山下>

市政参加に興味がある若者を探すのは難しいが、気がついたら市政参加をしていたという仕掛けが出来ればよいと思う。

学生に丁寧に寄り添うことは、行政単独では難しいが、大事なことである。学生に市政に興味を持ってもらうためには、グローバルセンターなど、別の人の手を借りる必要があると感じた。

(2) ヒアリング記録シート（ユースサービス協会）

団体名等	公益財団法人京都市ユースサービス協会（以下「ユースサービス協会」）
ヒアリング日時	平成30年10月29日（月）14時～15時30分
ヒアリング実施者	<市民参加推進フォーラム委員> 佐々木達憲委員，ハッカライネン ニーナ委員 <京都市職員> 松岡みさき
ユースサービス協会概要	1988年（昭和63年）3月に，青少年の自主的な活動の振興を図ることにより，京都市の青少年の健全な育成に寄与することを目的に設立された。「ユースサービスの理念」は，青少年が社会の担い手として成長するために，社会参加と自主的な活動の機会を提供し，必要な支援を行っていくことであり，ユースサービス協会はその理念に基づきながら，京都市など関係行政機関，青少年団体，青少年の育成に関わる人たち，青少年自身と協力しあいながら，活動を展開している。（HPより抜粋） <現在の事業の柱> ○青少年の自主的な活動促進のための事業の実施 ○青少年育成・支援のための調査研究 ○京都市青少年活動センターの受託運営（指定管理者） ○京都若者サポートステーションの受託運営 （厚生労働省及び京都市からの受託） ○子ども・若者育成支援地域協議会「指定支援機関」業務 （京都市からの委託）

<聞き取り内容>

京都市青少年活動センターの概要
青少年活動センターのメインターゲットは中学生から30歳までの若者であり，そうした若者の自主活動をサポートする施設であるが，施設そのものは年齢に限らず使っていただける。ユースサービス協会の事務局がある中京青少年活動センターには，2階に就労支援窓口，3階に引きこもり支援窓口があり，日常的に色んな年代の方が利用している。 「青年の家」という青少年活動センターの前身施設は，ユースサービス協会の設立よりも前に，国の事業として始まった。戦後，集団就職がされうる場所に，勤労青年たちの余暇施設として作られたものが「青年の家」である。2001年から青少年活動センターという名称に変えて，当初の設置目的とは違う目的で運営してきている。
若者が青少年活動センターに集まってくるきっかけ
学校帰りの時間帯である16時以降，若者が多くなる。 友達に聞いて来る場合や，親が知っていて親に勧められて来る場合，HPで「京都市自習室無料」で検索して来る場合などがある。中学生は日常の生活圏内にあるから来ている人がほとんどである。山科区は中学入学時にクリアファイルを配り，全員に1回は知らせた，という形をとっている。高校生は自習利用が多い。大学生はサークルの活動場所になっているので，活動場所として指定されて来ることがほとんどである。

市内には若者が自習をする場がほとんどない。部屋貸し事業は、部屋に色んな機能（防音、運動できる広さ等）があるので、そうした機能を目的に来る子がいる。また、居場所事業などのプログラムに参加する子もいるし、単に漫画を読みに来ている子もいて、サークル単位ではなく、個人で利用している子も多い。

利用される若者は、日常生活の延長線上で来る子もいるし、悩みを抱えて来る子もいるし、自習をしにだけ来るという子もいるし、様々である。

ユースサービス協会が実施する事業の広報方法（若者の集め方）

事業系なら市民しんぶんや民間の新聞などに載せてもらい、チラシを作成して広報している。学校や図書館にチラシを置かせてもらったり、協会の HP や SNS での広報など、一般的な広報方法と違いはない。メールは若者は見ないので使わない。センターによってはラインを持っている。青少年活動センターで直接会った若者に、チラシを見せながら参加を募る形が多い。

高校生よりも、大学生の方が忙しい印象。ただ、やりたい子は忙しくても「やりたい」からなんとか時間を調整してきている。

若者にとって関心の高いテーマであれば、広報方法は他の事業と変わらなくても、問い合わせは多い（例「子どもの貧困」に関してのボランティア）。

若者との関わり方

若者と関係性を作ることを大事にしている。誰々さんに会いにきた、話しにきた、というような、日常の中での関係性である。職員と若者の、日常的な関わりの中での話が、一步踏み込んだ相談や、チャレンジしたいといった相談につながったりする。「若者の成長を支える」という視点で活動するユースワーカーがいることが、ユースサービス協会の強みだと思う。

達成感、承認が大事。達成感、承認は、市政分野に限らずちょっとでも自分たちのやったことが反映されたりすると得られるし、手応え感、色んなところで積み重ねていくべき。承認は、若者が楽しんでやっていること、やりたいと思っていることについて「それいいね」と伝えてあげることである。何かしら熱い思いをもってやっていることで、その思いに共感したり、その活動を承認してあげることで関係性をつくり、その思いにつながる形で新しいことを提案したりすることができると思っている。

若者の市政に対する意識

選挙のことなど、ユースワーカーが若者に尋ねれば若者から答えが返ってくるので、若者は市政に関して関心が無いわけではない。しかし、そうしたことを安心して話せる場がない、と口をそろえて言う。また、色々な審議会などで若者の声を聞かれるが、反映された感がないと感じているようだ。

ユースカウンスル（後述）の準備会で集まっている若者との話し合いでは、まちの課題が沢山出てくるので、そういった点でも社会に対しての関心はあるのだと思う。

若者による協議会：ユースカウンスルの取組

現在、ユースカウンスルという若者による協議体作りに取り組んでいる。昨年の 12 月に勉強会を行い、現在は準備会として活動している。若者同士、若者と大人が対話できる場を設けるにはどうすればよいのかという議論から、若者が集えるサロンもしくは、ネットワークが必要なのだろうというところから始まっている取組である。

ユースカウンスルに参加している若者の間で、よく挙がるのは、バスや観光の問題。高校生からは、学校の中でしか出会いがないので、学校を超えた交流の場がほしいといった内容も挙

がった。若者それぞれに、自分ごとになっている問題がまちの課題として挙がっている。市民としての若者から見る世界観で、問題提起をしてくれている。

ユースカウンスルが、意識高い系の人たちが集まる場にはならないようにしようということで枠組みをデザインしている。

北欧には公的にユースカウンスルがあり、小学生からそうした活動に参加して、20代になって政治家になるという人がたくさんいる。若者と、政治家との距離がすごく近い。社会の大きな仕組みとして変えていかなければならないのかもしれない。我々としては変えていきたい。

若者の市政参加を進めるためのアイデア

若者の市政参加を進めるための枠組みを、若者と一緒に考えるのが大事で、そういうことを考える場に、若者を集める努力が必要だと思う。

大学進学をきっかけに京都に来る子が多い。しかし、住民票を移しておらず、選挙にコミットすることもしないようだ。将来の市民を育てるという点で、そこが一番大きなターゲット層だと思うので、そうした学生に対して何らかの方法で迫るのがいいと思う。引っ越す場合には住民票も移す必要があること等を周知し、選挙での投票を呼びかけるというのは、市政参加のきっかけになり得ると思う。

<ヒアリング実施者の所感>

<佐々木委員>

ユースサービス協会に来る若者について、「職員の誰々さんに会いたいから」来る子達がいるという話が印象的であった。やはり若者にとって、敷居が高いと感じられる活動には参加がしにくく、自分ごとになっていく感覚が第一歩となることを感じる。

一方通行ではなく共に創り上げるものとなることが市政参加を進めるのではないかと思うし、ヒアリングで話題となったユースカウンスルあるいは市政参加を部活動と並ぶような位置付けとしていくことも一考の余地有りかもしれない。